

令和6年5月25日開催

聴くオフ・ミーティング報告書

テーマ「多文化共生ってなに？」～外国人から見る杉並を話し合おう！～

区では、区政への区民参加の仕組みづくりを進めています。その取組の一つとして、身近な行政課題について、区長と区民が直接意見交換をする区政を話し合う会「聴くオフ・ミーティング」を開催しています。

令和6年5月25日は、「多文化共生ってなに？」～外国人から見る杉並を話し合おう～をテーマに、公募と無作為抽出した2000名の区民の中から参加していただいた39名の方と話し合いました。

区長から



区長になる前、約18年間海外に住んでいました。当初は友達もいなくて、言葉もあまり話せませんでした。子育てをしながらキャリアを中断することなく仕事を続けることができました。住んでいた国には、多様な文化のバックグラウンドの人々を包摂するという社会的な合意があり、私のように外国人で、子育て中の女性でも活躍できました。住み始めて5年後には参政権も得られ、国籍はなくても自分が住む国の地方政治に初めて投票できた時、社会から歓迎されていると感じました。多様性社会はすでに存在しています。多様な人たちが活躍できる社会は、個人にとって重要なだけでなく、その社会の強さだと思います。杉並区ではこうした人権を大切にすることを、総合計画、実行計画の中にしっかり施策として位置づけました。本日は多文化共生について、区民の皆さんから直接お話を聞ける貴重な機会です、どうぞよろしくお願いいたします。

日本語教育実践家 嶋田氏による講話

今日は、「現場から『多文化共生』を考える～活気ある地域社会をつくるために」をテーマに三つのお話をします。一つ目は、「事例から多文化共生を考える」です。日本語力に課題があり、小学校に入る時に「普通学級は無理」と言われたT君でしたが、地域ボランティアの方々からの支えもあり、みるみる頭角を現して、今では秋田県庁に就職することができました。環境が人を作るのです。二つ目は、「外国人にとっての3つの壁とは？」です。3つの壁とは「ところ・ことば・制度」です。この壁を取り除いた社会は、誰にとっても住みやすい社会になると思います。三つ目は、「今できることから始める」です。文科省の調査では、2012年に33,184人だった公立学校における日本語指導が必要な児童生徒の数は、10年後の2022年には58,353人となり1.8倍まで増えています。2024年の今日はさらに増えていると思います。「子どもの課題」は、待ったなしです。

多文化共生の原点となるのは、外国から来た人も「自分たちと一緒に社会を作っていく仲間なのだ」という考えを私たちが意識の根底に置くことです。そして、もう一步踏み込めば、外国人に限らず、誰もが異なる価値観を持って生きられる社会、誰もが自分らしくいきいきと生きられる社会こそが、多文化共生社会ではないかと思えます。



担当課からの説明



厚生労働省が発表した「将来推計人口」によると、2070年には、日本の総人口は30%減の8700万人に落ち込む一方で、外国人は大きく増加し、10人に1人が外国人となる時代がやってきます。

杉並区においても外国人が増えており、2024年の1月の段階では過去最高を記録し、1万9178人となるなど、10年前の1.7倍となっています。

総務省は、多文化共生を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義しています。ダイバーシティが、性別や障害等も含んだより広い概念であることに対して、多文化共生は、その中でも国籍や民族、文化に焦点を当てています。

杉並区はこれから多文化共生の実現に向け取り組んでいきますが、その柱となるのが、拠点の整備、日本語教育の推進、情報の発信と受信の強化です。こうした取組を通して、人権が尊重され、誰もが活躍し、いきいきと暮らせる杉並の実現を目指していきます。





第1回 10:00~12:30 第2回 14:00~16:30

全体トークでは半円状の車座になり、参加者が一人ずつ自分の意見を発表しました。以下は全体トークで出た主な意見です。

- 参加者 外国人が日本で困ったときに、それを解決する情報をどこでどのように収集すればよいのか、知りたい情報が必ずある場所を設けることが重要。
●参加者 社会は個の集まりだという意識を持つこと。外国人のみならず、人は自分と異なって当たり前というマインドから、人を尊重する気持ちが生まれる。
●参加者 外国人の視点からすると、こうして欲しいというのは多くあるが、外国人も相手が1歩踏み出せば、こちらは10歩踏み出すべき。
●参加者 仲良くなるには食事の場が良い。
●参加者 日本に住んで12年、今も日本語は上手でないが、最初は「こんにちは」しかできなくて大変だった。
●参加者 子どもにも小さな頃から、多文化への理解や、すべて人間は同じだという教育をしたい。



全体トーク



- 参加者 私のアイデアは交流(出会い)の場をつくること。外国人と日本人だけでなく外国人同士が出会う場もとても大事。
●参加者 文化的な違いを認め合い、杉並で共に生きていくために必要なのは、日本人や、杉並区民といった私達のアイデンティティの壁をこえること。
●参加者 日本語が分からないことが一番の壁。
●参加者 昨年日本に来たばかりで、いろいろなことが分からない。
●参加者 外国人はどこに行けば何の情報があるかがわからない。
●参加者 防災訓練で外国人を見たことがないので、ぜひ呼び込みたい。
●参加者 ベトナム出身です。外国人も初めて日本に来たときは、勉強しなければならぬことがたくさんあるが、日本の文化に慣れたら、日本にいろいろ貢献できる。
●参加者 漢字を読めない外国人にとって、読み方が分からないと言葉の意味を調べるのが大変なので、すべての漢字に振り仮名があればとても助かる。
●参加者 日本語が上手く話せない人や、日本語より英語のほうが得意な人たちと、自分は時間をかけて接してきたのかを考えた。

- 参加者 病院で言葉が通じなくて困った。大きな病院には外国人のために通訳者がいるとよい。
●参加者 将来10人に1人が外国人になれば、子どものクラスメイトに外国人がいることが当たり前になる。
●参加者 誰に聞いたらいいかわからず、情報を取りに行く方法も、そこに情報があることも知らない人が多い。
●参加者 文化の違いや暮らしのことなど、ネットで時間を決めて英語などの外国語で質問を受け付ける仕組みがあれば、ちょっとしたことも解決でき、質問からどんな課題があるかもわかる。
●参加者 ウクライナから避難民として母と来日しました。
●参加者 同じ地域に住む住民として共感が持てるよう、一つのテーマのもと具体的な共同作業ができるとよい。



区長の感想

この社会は個でできています。外国人・日本人というだけでなく、様々な個性が存在しているところから始まり、それらのダイバーシティをつなげ、理解していくということが、誰もが無意識に持っている偏見を意識することになります。多文化共生においては、特にマジョリティ（多数派）がそのことを意識することが大切です。

本日は、皆さんから様々な意見やアイデアを出していただき、これから区が多文化共生の方針をつくっていくための大きなヒントと力をいただきました。多文化共生は、地域社会の中で外国人の方も含めたコミュニティの皆さんと共につくっていくものですので、これからも皆さんと一緒に進んでいきたいと思えます。



多文化共生の担当課から

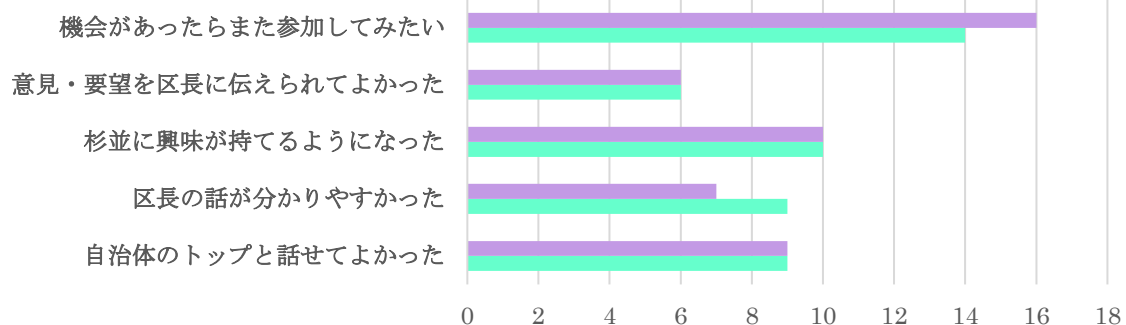
杉並区が目指す多文化共生の推進は、皆さんの行動変容で、新しい社会や価値観を創造していき、人権が尊重され 誰もが活躍し いきいきと暮らせる杉並を実現していくことです。今回のミーティングでは、この実現に向けて、区はこれからどんなことに取り組んでいけば良いのか、その方向性を示す貴重なご意見を伺うことができました。

地域との繋がりがないと、相談する相手が居なくて孤立してしまうこと。言葉の壁では、私たち一人ひとりが、相手のことを思い、優しい心で、易しい言葉で伝えていくことが必要なこと。情報を発信する際には、発信する側と受け取る側がうまくかみ合わない伝わらないこと。また、多くの方が、まずはお互いを知るために交流の場を望んでいることも分かりました。「こころ」「ことば」「制度」の3つの壁を乗り越えていくため、私たち一人ひとりの想いを積み重ねていき、「外国から来た」ということが「地方から東京に出てきた」と同じように話せる、「やさしい杉並」を目指して、今後も皆さんと一緒に多文化共生を推進していきたいと思えます。



懇談会に参加した感想（複数回答有）

■ 第1回 ■ 第2回



令和6年5月25日 聴くオフ・ミーティング報告書

<開催日> 令和6年5月25日（土）

<参加者> 区民39名、区長、文化・交流課ほか

令和6年7月 編集・発行 杉並区総務部区政相談課

〒166-8570 杉並区阿佐谷南一丁目15番1号 電話 03-3312-2111

